素敵な出会いが 人生をいろどる

第40回「小さな親切」はがきキャンペーン

今年は、「言葉」の力を感じる作品が多くありました。何気なく使っている言葉ですが、人を傷つけたり、励まし勇気を与えたり…。

言葉は「言霊（ことだま）」と言われるように、使う人の心・想いが伝わります。

コロナ禍によって人間関係がますます希薄となった今だからこそ、メールやスタンプではない、生の言葉が人と人をつなぎます。

大賞に輝いた南平（なんぺい）さんの心を揺さぶったのは、まさに店員さんの一言。マニュアルだけではない、店員さんの臨機応変な接客で、夫婦水入らずのランチを楽しむことができました。店員さんは、トイレに移動するときも観葉植物をどかしたり、帰りにはドアを支えてお見送りと終始お客さんに寄り添い、その親切に救われた外食となったそうです。

このほかにも、荷物を持ち痛む足をかばいながら階段を下りる婦人に、「筋トレをさせてください」と荷物を持ってあげた女子学生さんは、お礼を言う婦人に、「ご協力ありがとうございました」と笑顔で立ち去った……というエピソードを綴った作品も。なんて、ウィットに富む言葉でしょう。

審査をしながら、たくさんの気づきをもらいました。自分もこんな言葉を使いたい、と思った今年のエッセイコンテストでした。

（審査員より）

大賞

14:05のランチ

愛知県 南平 茜さん（38歳）

久しぶりの外食。

それだって、私たちは普通の夫婦のようにはいかない。

主人に手を貸し、車の後部座席から車椅子に乗せる。車椅子の後ろには酸素ボンベ、腕から伸びた点滴のルートが絡まないようまとめて、こちらも車椅子に固定する。私は替えの酸素ボンベをしまったリュックを背負い、息を整え、やっと店に到着。

ランチタイムの14:00を5分過ぎていた。

「コーヒーとケーキだけでも食べていこっか」

久しぶりの外食を楽しもうと振舞ったが、彼は残念そうに頷いた。

広い席に通していただくと、14:00までと書かれたランチメニューがまだテーブルに出ていた。恨めしかった。

お水を持って店員さんが現れ、笑顔で、

「ランチメニューも大丈夫ですよ」

「えっ？　14:00までじゃ？」

と聞くと、

「14:00前には、もうお店の前におられましたから」

ワッと声を出して泣いた私。見ていてくれた人がいる。闇のような在宅介護の中で、こんなに人の親切が、心遣いが染みたことはない。

二人で、ランチカレーを食べた。元気だった時に食べたのと同じで、本当に美味しかった。

第40回「小さな親切」はがきキャンペーン

後　　援：日本郵便株式会社・読売新聞社
協　　賛：株式会社河出書房新社
応募総数：1,955編
作 品 集：全入賞・入選作品を収録し、来年2月中旬発行予定

※入賞・入選者はWEBサイトで発表いたします。